

キャンパス・コラム

基礎訓練の大切さ

私の属している経済学部では、昨年から新入生を対象に「入門演習」という科目を設けている。20名を上限に、大学で勉強するうえで最低限必要と思われる能力を、半年間で身に付けさせようというクラスである。たとえば、ある問題を見つけ出し、それについて調べ、その報告を口頭および文書できちんとできるようにするのが主旨となる。

各演習のテーマは担当者にまかされており、私は『論文の書き方』という本を読みながら問題点を話し合い、それについてのレポートを毎回提出させ、それを添削して次回に返すという作業を繰り返している。学生たちの文章は大半、最初のうちは読むのに苦労するものばかりで、赤インクで真っ赤になったものを戻すことになる。それでも半年が近づくと、真面目についてきてもらえばだが、赤が急速に減ってゆく。口頭での発表も格段と上手になる。学生たちに

もともと理解力が欠けていたり、思考力が乏しかったりしたわけではあるまい。もっばらこういう面での訓練が不足していたというだけのことだろう。だが勉学面でのこうした訓練不足は、決して軽視できるような問題ではない。驚かされたといえ、分からない箇所があっても調べてこない者がいることだ。高校時代どうしていたのかと尋ねると、先生に聞きましたと平然として答える。辞書や事典を引く習慣がついていないのだ。もちろん自分で調べてきて発表する学生もいるが、どうもアンバランスな報告になることが多い。何で調べたかと問うとインターネットでという。さすがに現代的だなと思うが、問題点にフィットしない周辺事項を引き出してくる場合があるようだ。これは技術上の未熟ということなのか。もっと本質的なこととして、勉強は苦勞してこそ身につくし将来役に立つようになるという意識の欠如があるような気がする。学ぶにも苦勞と訓練が大切なのは体操と同じだよと、私は学生たちに繰り返している。

広報委員 大野 一道（経済学部教授）

編集後記

先日、九州の佐賀市近郊にある古代遺跡「吉野ヶ里」を訪ねる機会を得た。この『古代』という言葉を聞く、何となく時間がゆっくり流れ、のんびりした生活が想像される。ところが、私はある種の緊張感に驚いてしまったのである。そこには、古人達の『常に命のやり取りが続く緊張の世界』が見えたからである。建物の構造とそれを取り囲む城壁、見張り台の多さ、身分の格差を表わした生活地域の区分など、現代の我々とは全く相容れない生き方…。と、ここまで書いた時、私の頭に『常に命のやり取りが続く緊張の世界』は、最近の様子から、現代でも変わっていないという「恐ろしい思い」がよぎったのである。緊張は、緩急をつけながらも現代まで続いているのである。古人は、どうやってこの緊張を乗り越えたのだろうか。歴史に問うてみることで、道が見つかる気がしてならないのだが。

(広報課)

Hakomon
ちゅうおう

2001・11月号（第170号）

2001年（平成13年）11月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12
電話 03-3631-8141